

千葉市美術館
アーティストプロジェクト
報告書

つくりかけラボ07
植本一子 | 千葉市美術館
あの日のことおぼえてる？

あの日のこと
おぼえてる？

植本一子

質問④

あの日のこと
おぼえてる？

質問⑤

質問⑥

質問⑦

質問⑧

質問⑨

質問⑩

会期
2022年 令和
4月13日(水) - 7月3日(日)

植本一子 殿
年 月 日
時 分 天気

アーティスト
植本一子 代表で

テーマ
コミュニケーションが
はじまる

概要
「つくりかけラボ」とは、「五感で
たのしむ」「素材にふれる」「コ
ミュニケーションがはじまる」い
ずれかのテーマに沿った公開制作
やワークショップを通して空間を
つくり上げていく、参加・体験型
のアーティストプロジェクトです。

第7回は、写真家の植本一子さ
んをお招きし、過去のできごとを
思い起こし記録に残すプロジェク
トを行いました。参加者は、アン
ケートの記入やセルフポートレ
ートの撮影を通じて、それぞれの思
う「あの日」について想いを巡ら
せます。約3ヶ月間にわたり、会場
にはたくさんのアンケートと写真
が集まり、かけがえのない思い出
が降り積もる場となりました。

か？くわしく教えてください。



オープンワークショップ 「あの日のこと おぼえてる？」

会期中つねに開催
参加者:376組、775人

植本さんによるアンケートのサンプル(一人用)→

①アンケートを書く

「『あの日のことおぼえてる?』ときかかれた時に思い出すことはなんですか?」という質問から始まるアンケートに答えます。用紙は、一人用と複数人用の2種類あり、それぞれ11個の質問が並んでいます。ひとりで参加した方は、だれかと過ごした「あの日」のことを、複数人で参加した方は、いっしょに参加した人と過ごした「あの日」のことを思い出しなが記入します。



アンケート用紙をダウンロード



一人用



複数人用

②写真を撮る

会場内に作られた撮影ブースでセルフポートレートを撮影します。ブースは、壁とカーテンで仕切られ、外からは見えません。植本さんの声を収録したアナウンスにしたがって、壁に投影されたすがたを確認しながら、リモコンのボタンを押してシャッターを切ります。シャッターチャンスは一度きり。撮った写真は、自動的にレイアウトされ、3枚ぶん印刷されます。



③会場に残す

アンケートは、カーボン紙を使って複写される仕組みで、2枚できあがります。それぞれに写真を切って貼りつけ、完成。スタッフが日付入りの受領印を捺し、1枚は美術館に提出、1枚は持ち帰ります。また、会場の壁にかかったフレームに、残りの1枚の写真を入れて飾ります。アンケートも写真も、会期にわたって展示され、鑑賞だけでも楽しむことができました。



アーティストワークショップ 「あなたの物語を教えてください。」

4月24日(日)、5月3日(火・祝)
参加者:4組7人、4組12人
講師:植本一子

植本さんのファシリテーションのもとアンケートを記入し、そこで交わされたコミュニケーションやアンケートの内容をもとに、植本さんがエッセイを執筆するワークショップを開催しました。エッセイは、聞き書きのかたちで、参加者のみなさんの「あの日」について綴られます。植本さんからは、アンケートを深掘りする質問が投げかけられ、参加者のみなさんは、ためらいなく楽しみに質問に答えていました。完成したエッセイは、会場に展示されました。



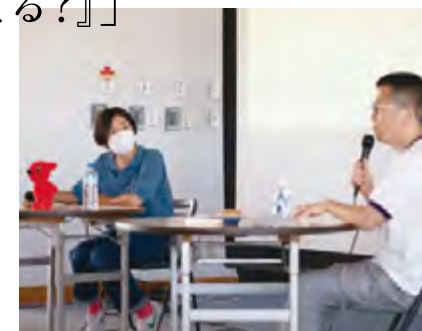
アーティストトーク

「鳥羽さんといっしょに『あの日のことおぼえてる?』」

6月26日(日) 14:00~15:30
来場者:45人
登壇:植本一子、鳥羽和久

教育者で作家の鳥羽和久さんをお招きし、プロジェクトを出発点に、植本さんがどういった想いで企画を作り上げたのか、鳥羽さんはそれを体験してどのように感じたのか、トークが繰り広げられました。写真を撮ることや文章を書くことに関わる本質的な話題も挙がり、プロジェクトを深く掘り下げる機会となりました。

*pp.4-5に再編した内容を収録しています。



「あの日のこと おぼえてる?」 往復書簡

植本さんの滞在日がかぎられていたため、監視スタッフから、現場で起きたできごとややりとりを募集し、「本日のホットピック」として植本さんに共有しました。植本さんからは、それぞれのトピックにお返事をもらい、美術館と植本さんのあいだでコミュニケーションを取ることができました。

こちらからお読み
いただけます→



アーティストトーク「鳥羽さんといっしょに『あの日のことおぼえてる?』」再編

鳥羽 「あの日のことおぼえてる?」を開催することになった経緯は、どういったものだったんですか。

植本 お話があったのが、開幕の一年前くらいですね。「写真を通して場を作るということをやってみませんか」と千葉市美術館の庄子さんから連絡があり、始まりました。美術館での展示は何回か経験してきましたが、こういった場を一から作るという展示ははじめてだったので、正直、最初は「できるのかな」と思いましたね。

鳥羽 展示をひととおり体験しましたが、「つくりかけラボ」の名前にふさわしく、参加者自身も「つくりかけ」の過程にあることが実感できるような展示ですよ。展示を通していろいろ思い出していくと、過去と繋がっている自分の存在を感じるんですが、当然、こう語っているいまも、いつか思い出されることになる。そういう繰り返しが、「つくりかけ」にふさわしいなと思いました。

植本 本当に、「自分はなにができるんだろう」というところから始まったんですが、こういうかたちになりましたね。ゼロから始まり、いま、完成へ向かっている感じです。最終日を迎えたら、やっと完成。

鳥羽 アンケートのなかで、「ふつうはこんなこと聞かないだろう」という、一子さんらしいぶっこみを感じた質問があります。「自分たちの関係にオリジナルの名前をつけるとしたら?」という質問ですね。こう聞かれたら、親子や友人など続柄を書くと思うんですが、参加者のみなさんが書いたものを見てみると、9割

5分くらい違うことを書いているのがおもしろくて。なぜこの質問入れたんですか。

植本 会期中、アーティストワークショップを2回やりました。参加者の方といっしょにアンケートを書き、それをもとにわたしがエッセイを書き起こすという内容だったんですが、その質問になったときに、「これはどういう意味ですか」と聞かれて。たとえば、「おふたりはどういう関係ですか」と聞かれたら、「恋人、夫婦、家族」のように答えるじゃないですか。でも、「それ以外で書いてください」と答えました。そこを掘り下げたかったんです。

鳥羽 滝口悠生さんとの往復書簡『ひとりになること 花をおくるよ』*でも、一子さんは、天然スタジオの紹介で「家族写真」という言い方を避けて書いています。フォトスタジオにおいて家族写真という言葉避けることは、とてもめずらしいと思うんですよ。やはり、家族とか友達とか、そういった既存の関係性を表す言葉に物足りなさを感じているんですかね。

植本 そうですね。「一般家庭の家族写真」となると、そこからあぶれてしまう人たちがいるなって。わたし自身、夫が亡くなって4年経つんですが、いまは違うパートナーがいます。でも、自分としては、もう一度結婚という形式を選択する気がないんですね。そうなると、わたしたちは「家族」とは認められないんだな、と。その選択ひとつで見える世界が変わった気がして。結婚をして、家族になることを選ぶこともできるけれど、選ばない。じゃあ自分たちの関係はなんだろ

う? と。こんな思いをしている人がたくさんいるのか、とそこで気づいて。もちろん、家族というかたちをとっている人も周りにたくさんいるんですが、そういう人たちを否定するわけではなくて、だれもが「家族」というかたちをとれない現状でも、自分たちを肯定できるようにしたいという気持ちからですね。

鳥羽 そういった違和感がない人もふくめて、自分たちの関係性について一般的ではない言葉で表してみることは、すごくおもしろい試みだと思います。友達と言えば済むものを、あらためてオリジナルの名前を考えるだけで関係性を見つめ直すきっかけになりますから。

植本 あと、アンケートを作るうえで大事にしたことがあります。アンケートは、一人用と複数人用を用意したんですが、複数人用のアンケートでは、主体が決まらないようにすることを意識しました。基本的に、代表で書く人がいるけれど、いっしょに答えた人の名前も書き、みんなやって、みんな考えて。書く人の主観だけににならないように工夫しました。質問の文言も、そのようになっています。

鳥羽 たしかに、あらためて見てみるとそう感じますね。わたしは一人で参加したんですが、一人だと、おそらく複数人で参加した人とまったく違うことが起こるんですね。一人だからこそ、いまいない人に想いを馳せて、言葉が出てくる。思い出すことによって、他者が人生のなかに織り込まれていって、積み重なって、新しい自分になるような。もしかしたら、一人で参加した人と複数人で参加した人では、体験した内容がだいぶ変

わってくるかもしれないと思いました。アーティストワークショップについてもお聞きしたいんですが、まったく知らない人の話を聞く体験はどうでしたか。

植本 わたしはふだん文章を書くんですが、知らない人の話を聞き、さらにそれをエッセイにすることは、やったことがありませんでした。でも、意外と楽しくできましたね。これまで、なにかを書くとなると、8割は自分のことを掘り返して苦しみながら書いていたんですが、その8割が相手のことになり、自分の気持ちはそえるように少しだけ足せばいい。そう思うと、とてもスムーズでした。

鳥羽 できあがったエッセイを読みましたが、いろんなことが描かれていたね。一人の視点ではなく、そこにいた複数人の視点が見えるような文章が多かったです。関係性の話で言えば、たとえば、男性二人女性一人の3人組のオタ友のみなさん。

植本 3人組のうち二人で来てくれたんです。男女でいらっやっだったので、はじめはカップルかと思ったんですが、そうじゃない。しかも、ここにはいない仲良しがもう一人いて、3人のことを書きたい、と。自分で関係性云々と言ってアンケートを作っておきながら、正直、びっくりしてしまっただけです。いろんな関係の人たちが、自分たちだけの関係を作って生きていることがわかって、ほんとうに嬉しかった。

鳥羽 そういう関係が歓迎されて、ふつうのこととして受け止められることって少ないですよ。枠組みから外れる場がもっともっとあった方が、わたし自身も

楽だな、と思います。そういう関係性の話を聞いてもらえる場であったことも、アーティストワークショップのおもしろさのひとつだと思います。そして、いろんな関係性の人たちが、ひとつの写真に写っていることもおもしろい。わたし自身は、撮るのが少し恥ずかしかったですね。

植本 わたしも写真は苦手です。わたしは写真を撮るほうですが、苦手だから撮られるほうの気持ちも想像できます。撮られることがストレスにならないためには、あまり人の目がないほうがいいんですよ。こちらからの声掛けも最低限でよくて。今回、わたしが滞在していなくても写真が撮れる仕組みを作るために、撮影方法の説明を録音し、声でアナウンスするようにしました。案内係のスタッフさんも、アナウンスが終わったらブースの外に出てもらうよう徹底して。撮影するときは、その人だけの空間で、いつシャッターを押してもいい。自分で判断して写り方も決められる。

鳥羽 あの環境だからこそ思い切ってハッスルして撮ったのだろうな、と思える写真もあって、いろいろと想像しながら見ていました。テクニカルな不自由さはあるけれど、自由に楽しめるあの空間は新鮮ですね。

植本 わたし自身も、展示の開幕前に、サンプルとして一人用のアンケートを書きましたが、自分でアンケートを作っておきながらとても悩みました。いざアンケートを前にしたら、「なに書こう」となってしまって。いまのパートナーのことを書いたり、子供のことを書いたりしてもいいんですが……。人が死んだとき

の話だから、これをサンプルにしていいいのかとも思ったり。

鳥羽 あまり気になりませんでした。ただ、だしかにそうですね。でも、正直に書かれていますよね。もしかしたら、書く相手が生きている場合は、葛藤が大きくなるのかもしれないと思いました。わたしが書いていいのかな、とか、そういう感情を覚えた人もいるのだからかと思って。なので、他人を語ることの問題というのも、ここで考えられるなと思ったんですよ。

植本 夫については、これまでいっぱい書いてきているんですが、アンケートを書いたことで、なにかいったん腑に落ちた感じはありますね。このときの話はこのでやっと終わった!みたいな感覚。夫のことにまた書くかもしれないけれど、あの日のことをアンケートに書くことで落ち着いたところは正直ありますね。

*「ひとりになること 花をおくるよ」:植本一子さんと作家の滝口悠生さんが2021年11月から2022年4月のあいだに交わした書簡をまとめた本、2022年刊行。

鳥羽和久(とば・かずひさ)
文学修士(精神分析・日本文学)。株式会社寺子屋ネット福岡代表取締役、唐人町寺子屋塾長、及び単位制高校「航空高校唐人町」校長として、小中高生の学習指導に携わる。教室には書店とらきつねを併設し、各種イベントを運営。教育や文化に関する講演も多数(NHKカルチャー「推し」の文化論[2022年]など)。著書に「親子の手帖 増補版」(鳥影社)、「おやときどき子ども」(ナナロク社)など。朝日新聞EduAお悩み相談室を担当。西日本新聞「こども歳時記」や、webちくま(筑摩書房)「10代を生き延びる安心な僕らのレジスタンス」などの連載がある。

「あの日のことおぼえてる？」を終えて

話し手：植本一子

聞き手・テキスト編集：千葉市美術館 庄子真汀

取材日：2022年9月2日

どんな人にも、それぞれの人生があり、物語を持っている。そのことについて教えてほしい、と考えていました。みんなが自分の人生について文章を書いたらおもしろいのでは？と常々思っています。だからこのようなアンケートを用意したのですが、集まったものを読んだら、私の想像をはるかに超えていた。そこでは、いろんな人が、それぞれの人生を生きていて。書いた人にとっては人生のごく1ページかもしれませんが、どんな人にも物語がある、という証明になったのではないのでしょうか。

ふだんは、天然スタジオという自分のスタジオで一般の方の写真を撮っています。そこはとても小さなスペースで、大人が4人もいれば狭く感じるようなスタジオです。それはそれでこぢんまりとしていいのですが、今回のプロジェクトの撮影ブースは、一から作ることができたので、スペースを大きく取ることにしました。カメラマンもいないし、撮る時はのびのびとしてほしかった。自分たちのすがたを確認しながら、好きなタイミングでシャッターを押す。純粋な撮影体験とは異なるかもしれませんが、これはこれで、「自分が認めた自分のすがたを撮る」という意味合いが生まれたような気がします。

「自分／自分たちしかいない空間で写真を撮る」ということは、このプロジェクトで一番こだわった部分でした。わたし自身が、撮られることが苦手だからこそ、ストレスのない環境をつくりたかった。その人のいい表情、いい瞬間というのは、誰かに見



られていては、なかなか出てこないのではないかと思います。だから、とにかく人がいない空間で、好きなタイミングで撮れることを大事にしました。

そのおかげか、みなさん抵抗なく写真を撮り、そして飾ってくれていたように感じます。そのことにも、実は少し驚きました。自分で企画しておきながら、このプロジェクトは、参加するハードルが高いかな？と思っていたからです。写真を撮ることに慣れている、プリントして飾ることは新鮮な体験だったのではないのでしょうか。手元に残る形にすることを、もっと身近な行為として感じてくれていたらうれしいです。

会期中、何度か会場を訪れたり、アーティストワークショップを行ったりして、来場者の方のおはなしを聞いたことも、とても良い経験になりました。とくにアーティストワークショップでは、自分たちだけでアンケートを書くことと、他者の問いかけを通

してアンケートを書くことのアきらかな違いを感じました。こちらからさまざまな質問を投げかけ、いっしょにアンケートを書いていきましたが、話が枝分かれした先に、本人たちだけでは出てこなかったであろうお話や感情もあったからです。きっとそれは、自分たちだけで書いていたら、取り上げられなかった部分かもしれません。

このようなプロジェクトを企画すること自体がはじめてだったので、開幕するまで不安がありました。無事に終わることができて、本当にホッとしています。これまで、自分の内側から出てくるものを、自分のできる小さな範囲でしかつくってこなかった、人の手を借りたり、来場者に参加してもらったりするイメージがなかなか湧きませんでした。けれど、今回のプロジェクトを通して、新しいやり方を知ることができました。自分も作品を一からつくることができるんだ、と自信につながったと思います。

「あの日のことおぼえてる？」が、訪れた人の背中を押す場になっていたらうれしいです。実際に、さまざまな関係性を持った、たくさんの人たちがアンケートに答えてくれました。あの質問を通して、ちょっとでも立ち止まって考えたり、自分の知らない人の人生について思いを馳せてくれたら、それだけでこのプロジェクトは大成功です。

植本一子(うえもと・いちこ)

1984年広島県生まれ。2003年にキャノン写真新世紀で荒木経惟氏より優秀賞を受賞。写真家としてのキャリアをスタートさせる。2013年より下北沢に自然光を使った写真館「天然スタジオ」を立ち上げ、記念撮影をライフワークとしている。おもな展覧会に2019年「アカルイ カテイ」(広島市現代美術館)、2021年「『わたしたちのかたち』出版記念写真展」(ON READINGほか)など。おもな著書に「かなわない」(2016年、タバックス)、『家族最後の日』(2017年、太田出版)、『フェルメール』(2018年、ナナロク社+ブルーシープ)など。おもな写真集に『うれしい生活』(2019年、河出書房新社)などがある。

<http://ichikouemoto.com/>

「あの日のことおぼえてる？ きょうのこと、 いつか思い出すかもね。」*

千葉市美術館 庄子真汀

プロジェクトに向けた打ち合わせで、早い段階から浮かんでいたキーワードが、「関係性」でした。それは、いわゆる家族、恋人、友人、知人といった、名前のついた関係だけを想定するものではありません。植本さんは、「すべての関係性を認める、そういう内容にしたい」と力強く語りました。

こうして生まれたのが、プロジェクトの核となる「アンケート」です。形式のもとにあるのは、まさに婚姻届や履歴書。欄には、「あの日」を深掘りする質問が並び、参加者はそれらに答え、写真を撮り、美術館に提出します。

植本さんにお声がけしたきっかけは、写真スタジオを運営している植本さんならば、写真を使ったおもしろいことができるだろう、というなかば楽観的な妄想からでした。そのため、はじめてアンケートのアイデアを聞いたとき、正直、少しの戸惑いを覚ええました。こちらが想定していたのは、写真をきっかけとしたコミュニケーション、つまりとても現在の活動だったからです。しかし、植本さんから出てきた案は、「過去を思い出し、未来へのお守りにする」こと。こちらの想定が、いかに狭い世界にとどまっていたかを思い知りました。

結果として「あの日のことおぼえてる？」は、過去・現在・未来につらなる長い時間軸をふくみ、当初の構想をはるかに超える広がりを持った内容になりました。年齢性別を問わずあらゆる人を受け入れる柔軟さも持ち合わせ、じつにたくさんの人に参加していただきました。

会場に残された370枚を超えるアンケートには、その数だけの「あの日」が綴られています。その人にはその人の「あの日」があり、関係性がある。そして、そのどれもが、等しくかけがえのないものである。「あの日のことおぼえてる？」は、その事実の、揺るぎない証になったと言えるでしょう。

写真家、そして作家として活動する植本さんだからこそ、美術館においてこのようなプロジェクトができたのだと強く思います。「あの日のことおぼえてる？」もまた、いつか時が経ち、だれかにとっての「あの日」になることができれば、こんなに嬉しいことはありません。

*アンケートを持ち帰るための封筒に印字していた植本さんの言葉。このプロジェクトを象徴するテキストです。

つくりかけラボ07

植本一子 |

あの日のことおぼえてる？

つくりかけラボ07

植本一子 |

あの日のことおぼえてる？

報告書

会期

2022年4月13日(水)~7月3日(日)

編集・発行

の何をなんと呼び合っていますか？ 千葉市美術館

主催

千葉市美術館

撮影

平松市聖

会場施工

株式会社Office Toyofuku

デザイン

佐々木暁

撮影システム制作

のテクニカルディレクター:中山祐之介つけると表紙フォーマット

エンジニア:曾根貴了

加藤賢策(LABORATORIES)

プロデューサー:稲垣雄史

印刷

株式会社エイチケイグラフィックス

グラフィックデザイン

佐々木暁

前をつけた理由を教えてください。

発行日

作家滞在日

2022年10月13日

4月13日(水)、23日(土)、24日(日)、

5月3日(火・祝)、14日(土)、22日(日)、

6月5日(日)、10日(金)、26日(日)、

7月3日(日)

来場者数

の2,371人れどんな時に写真を撮りたいと思いますか？

(大人2,002人、中学生以下369人)

※ここまで書いたら、^{まっせい}撮影ブースで写真を撮りましょう。

と今と変わったことはありますか？

後の自分たちにメッセージを

のあとは何をしましょうか？

受領印